

編集後記

(55巻 第8号 2009年8月)

先日のセミナーで元ラグビー日本代表、泣き虫先生の講演を聴く機会があった。講演ではご自分のラグビー人生を紹介しながら、教育における「気づく」ということの大切さを話された。田舎育ちの大学ラグビー部補欠選手が、自分の至らないところに「気づく」ことによって超一流の炎のフランカーへと成長し、そして京都の無名高校をラグビー日本1へ導いた過程を、楽しいジョークをふまえて講演された。圧倒的な人間力を感じ取りながら、本当の教育とは何かを教えていただいたように思う。また、参加者全員が「気づかせて動かす」という先生の文庫本をいただいた。「気づき」があれば、人間は変わることが出来るし、大きく成長できる。

医学教育に限らず、今の教育にはマニュアル、ガイドライン、カリキュラムが整備されている。教育システムが整備されることは喜ばしいことではあるが、それに伴って生身の人間同士の触れあいが軽視されているように思われてならない。発展途上の若い医師達に、どのように「気づき」の機会を与えていけば良いのか。夏休み前に、また大きな宿題をもらった。

(小川 修)